

嚶鳴之図に寄せて

童門冬二

嚶鳴とは「鳥が声を合わせて鳴くこと」と漢和辞典に書いてあります。それもオスとメスがオウオウと鳴き交わすことだそうです。しかし細井平洲先生はこの光景を、

「必ずしも愛をささやきあっているのではない」と説明されます。ではなんのために鳴きあっているのかといえば、

「身近な社会問題を討論しているのだ」

といわれます。平洲先生が江戸におけるご自身の学塾を「嚶鳴館」と名づけられたのは、そういう意味がこめられていました。つまり、

「この塾で学ぶ者は、ただ古いテキストの字句解釈で時間をすごすのではなく、現実についている身近な問題をテーマにして、どうすればよいかを大いに議論してほしい」

ということなのです。平洲先生の、

・学んだことは必ず実行する。

・実行できない理論は学問ではない。

というきびしい「生きた学問論」の具体化です。

ということはずっと頭の中では理解してきましたが、「嚶鳴」の具体的なイメージが実をいえばなかなか描けませんでした。

ところが先日大分県竹田市の首藤市長さんのご尽力によって「嚶鳴之図」を入手することができました。二十六羽の番(つがい)になった鳥が、オウオウと鳴き交っている様子がひとめでわかります。そのまま、

「平洲先生の塾で議論する門人たちの姿」

を思わせます。

ごらんだだけで、平洲先生の深い志を私たちがさらに認識する助けになると思います。私たちが絵の中の一羽の鳥なのですから。



鍋木雲潭作「嚶鳴之図」(文化十二年(一八一五)、童門冬二蔵、撮影・堤勝雄)